

中学校家庭科における「日常着の手入れ」に関する課題について

小林祥子*・木村美智子**

(2016年10月28日受理)

A Study on Care of Clothes in Junior High School Home Economics

Shoko KOBAYASHI and Michiko KIMURA

キーワード：日常着の手入れ，洗濯，洗剤，実習・実験，中学校家庭科

現在、多くの種類や機能をもつ洗濯機や洗剤が開発されるなど家庭洗濯を取り巻く環境が変化している。また、コマーシャル等の企業の宣伝に惑わされ、消費者は確かな知識をもとにした適切かつ主体的な洗濯ができていない現状が見られる。そこで、本研究では家庭科における中学校家庭科学習指導要領C(1)ウのうち補修を除く「日常着の手入れ」(文部科学省, 2014)の学習内容と課題を明らかにすることを目的とし、中学校家庭科教科書の分析及び家庭科教員を対象とした日常着の手入れに関する質問紙調査を行った。その結果、教科書に記載されている内容では新型洗剤の情報を知ることができず、教科書の情報だけでは十分ではないことが示唆された。さらに、家庭科の中における実習・実験の位置づけとしては、教員は実習・実験は重要であると考えているが、「洗濯機による洗濯の実習」については実施できていないということが明らかとなった。以上のことから、学んだ知識・技術の定着や活用を図る実習・実験が十分に実施できていないため、確かな知識をもとにした適切かつ主体的な洗濯ができず、新しく開発された洗剤・洗濯機への応用力を生徒は身につけることができていないのではないかと推察した。

はじめに

現在、家庭における消費者の洗濯行動が変容している。その背景には、近年、種類や性能が多岐にわたる洗濯機や洗剤が開発される等、衣生活を取り巻く環境の変化がある。例えば、ドラム式洗濯機の開発、超濃縮コンパクト型洗剤やジェルボール型洗剤、香りづけを強調する柔軟剤の発売等が挙げられる。技術の進歩により洗濯機や洗剤等の選択の幅が大きく広がり、省エネ・節水型の洗濯機を使用したり、様々な種類の洗剤を選べるようになってきていると考えられる。

しかし、消費者は多くの種類の洗剤や洗濯機に囲まれる中で、コマーシャル等の企業の宣伝に惑わされ、適切かつ主体的な洗濯ができていないという現状が見られる。その原因には、家庭科教育

*茨城大学大学院教育学研究科 **茨城大学

において洗濯に関する正しい知識・技術を身に付けることができていることが考えられる。例えば、国立教育政策研究所(2009)の報告によると、セーターの洗濯に適した洗剤を選択する問題で、正答(「中性の合成洗剤」)を選択した生徒の割合は23.2%と低い結果となった。こうした結果をうけ、適切かつ主体的な洗濯ができるようになるためには、家庭科教育の衣生活分野において、洗濯に関する十分な知識・技術を身に付けることが重要であると考えられる。なお、本論文では「適切かつ主体的な洗濯」のことを「汚れや衣服材料などによって洗剤や洗濯方法について知識を持って適切に判断できる洗濯」と定義する。

そこで、本研究では、家庭科教科書の分析及び家庭科教員への中学校家庭科における日常着の手入れに関する質問紙調査を通して、衣生活分野における中学校家庭科学習指導要領 C(1)ウのうち補修を除く「日常着の手入れ」(文部科学省, 2014)の学習内容と課題を明らかにすることを目的とする。

研究方法

1. 中学校家庭科教科書の分析

A社、B社の2社の中学校家庭科教科書から「日常着の手入れ」の単元について現在取り扱っている内容とその課題を明らかにした。「日常着の手入れ」では、衣服を快適に着用するために、洗濯や補修などの手入れが必要であることを理解し、衣服の材料や汚れ方に応じた日常着の洗濯と、衣服の状態に応じた適切な補修ができるようになるための内容を取り扱っている(文部科学省, 2014)。

2. 「日常着の手入れ」の授業内容に関する質問紙調査

1) 調査対象

I県内の国公立中学校178校を対象とし、平成27年7月～8月に家庭科教員への調査を実施した。調査における倫理的配慮として、学校長及び家庭科主任あてに調査の趣旨、プライバシーの保護に十分配慮することを記載した依頼状を送付し、同意が得られた場合にのみ調査票を記入し返送してもらった(返送をもって、同意が得られたと判断した)。調査票の回収率は70.2%(125件)である。

2) 調査内容

中学校家庭科の「日常着の手入れ」の授業について、質問紙調査を実施した。表1に示すように授業に対する教員の意識及び教員から見た生徒の学習意欲などの質問から構成されている。

授業については、「日常着の手入れ」における授業時数や教えている項目、実習・実験の有無等の調査をした。この調査から、I県内の中学校における「日常着の手入れ」に関する授業の実態を明らかにしたいと考えた。教員の意識については、実習・実験の重要性や指導上の難しさ等を質問し、教員が「日常着の手入れ」の単元をどのように考えながら、授業をしているのか調査した。さらに、現状の洗濯行動と授業との関連性を明らかにするために、中学校家庭科学習指導要領には記載がないが現在注目されている漂白剤・柔軟剤・新しいタイプの洗剤(超濃縮コンパクト型洗剤、ジェルボール型洗剤等)について授業で取り上げる必要があるか質問した。

表1 調査項目

<p>1. 授業について</p> <p>授業時数/教えている項目/授業時数は十分であるか（十分でない指導項目・理由）/実習・実験の有無/使用している教材・教具/生徒の意欲を高めるための工夫点</p>
<p>2. 教員の意識</p> <p>実習・実験は重要か/指導上の難しさ/単元「日常着の手入れ」は重要か/漂白剤・柔軟剤・新しいタイプの洗剤を取り上げる必要があるか（理由）/洗剤についての情報収集</p>
<p>3. 教員から見た生徒の学習意欲</p> <p>日常着の手入れについて取り上げた内容に対する生徒の学習意欲</p>

結果および考察

1. 中学校家庭科教科書の記載内容と課題

教科書分析の結果、双方の教科書に共通して、洗剤についての記載内容に課題が認められた。教科書の洗剤についての記載事項と現状の市販洗剤についての調査結果を表2に示す。現状の市販洗剤には、教科書の記載内容にはない液性や用途の違いが見られることが分かった。

A社、B社どちらの教科書にも洗剤は石けんと合成洗剤についての記述があった。その液性について合成洗剤は弱アルカリ性または中性と書かれており、液性についてはこの2つのみの記載である。一方で、現在、従来にはないタイプの弱酸性洗剤が発売されていることが分かった。また、教科書では中性洗剤の用途について、毛・絹と書かれているが、用途が綿・麻・合成繊維となっている新しいタイプの中性洗剤も発売されている。

以上の結果から、現在発売されている洗剤の液性・用途は必ずしも教科書通りとはいかなくなっていることが明らかとなった。新しいタイプの洗剤が開発されている現在では、従来通りの考え方だけでは通用しなくなっており、消費者一人一人が洗剤の表示をよく見て、洗濯することが適切かつ主体的な洗濯をするためにも重要であると考えられる。そのような消費者を育てるために、家庭科の授業においては洗剤の表示をよく見て洗濯をするなどの指導が必要であると考えられる。

表2 教科書の洗剤についての記載事項と現状の市販洗剤の種類

教科書の記載		現状の市販洗剤	
液性	用途	液性	用途
弱アルカリ性	綿・麻・合成繊維	弱アルカリ性	綿・麻・合成繊維
中性	毛・絹	中性	綿・麻・合成繊維 毛・絹
弱酸性	新しいタイプのため記載なし	弱酸性	綿・麻・合成繊維

2. 「日常着の手入れ」の授業に関する調査結果

「日常着の手入れ」の授業で教えている項目について質問した結果を図1に示す。全項目の中で「取扱い絵表示」を教えている学校が最も多く、ほとんどの学校で指導していた。また中には、「漂白剤」や「柔軟仕上げ剤」、「ドライクリーニング」を取り上げている学校が2~4割程度存在し、教科書や学習指導要領に記載は無いことも洗濯をするために必要な知識と考え、積極的に取り上げている教員がいることが明らかとなった。

次に、「日常着の手入れ」の授業内で活用している教材・教具を質問した結果を図2に示す。「合成洗剤」を使っている学校が一番多く、次いで「視聴覚教材」、「繊維や布の試料」と続いた。

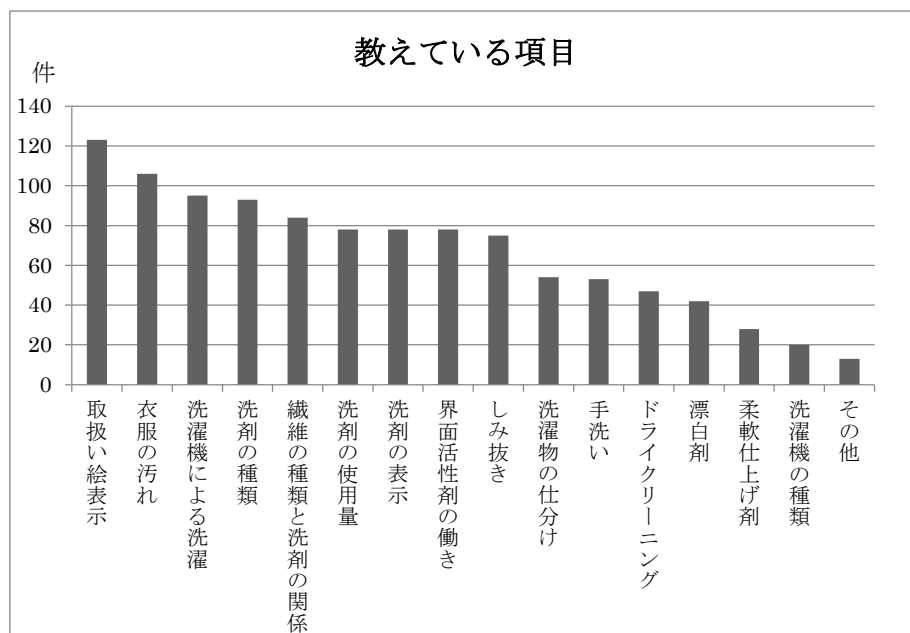


図1 教えている項目 (N=125)

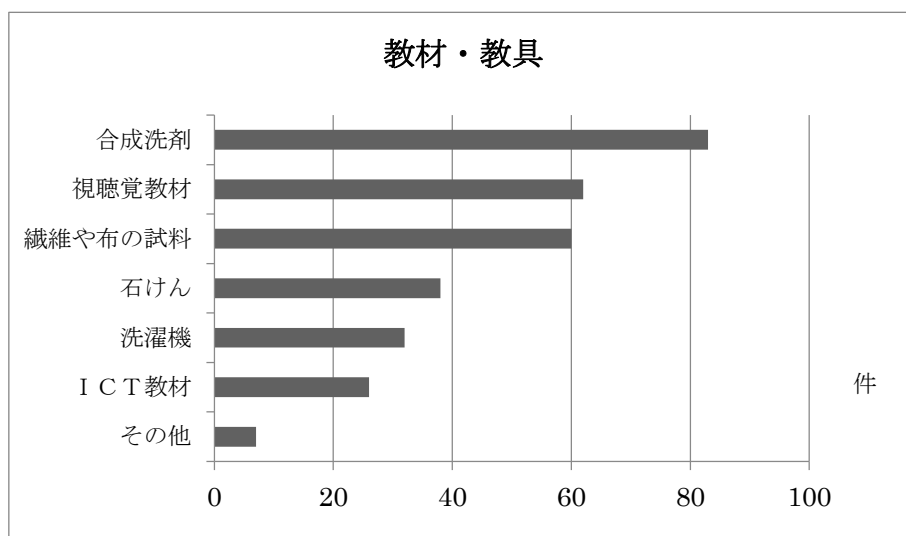


図2 活用している教材・教具 (N=125)

「日常着の手入れ」の授業において生徒の関心・意欲を高めるために工夫していることを113名が自由記述で回答した結果を表3に示す。

最も多かった工夫点は、実習・実験を取り入れることであった。しかし、十分に実習・実験を取り入れることができていない現状があるのではないかと考えられる。この点については、次節で詳しい考察を行う。次に多かったのは、実物や見本を用意することであった。活用している教材・教具の集計結果と合わせて考えると、合成洗剤や繊維・布の試料等を主に使用し、それらを生徒に見せながら指導することによって、関心・意欲を高めていると考えられる。

表3 生徒の関心・意欲を高めるための工夫【自由記述】(N=113)

工夫点	人数
・できるかぎり実習・実験を取り上げている。	39
・実物や見本を用意する。	25
・資料や視聴覚教材を利用する。	18
・生徒が日常着用している衣服を使う。	8
・家庭での実習の宿題を出している。	7
・生徒にとって身近なものを使っている。 ・生徒の実態に合わせた内容を取り入れている。	各6
・調べ学習を取り入れている。	4
・実体験や失敗談を取り上げる。	3
・ゲームを取り入れている（ビンゴ、かるた）。 ・新しい洗剤や柔軟剤の情報を取り入れている。 ・問題解決的な活動を取り入れている。	各2
・実際に羊毛をフェルト化させている。 ・衣服を丁寧に扱うことを意識させている。 ・生徒の実生活で起こりそうな状況を取り上げる。 ・生徒個人の物を使う。 ・取り扱い絵表示については表示カードを作製し、使っている。 ・必要性を感じさせるために導入を工夫している。 ・清潔を保つことの有意性について具体例を挙げて気付かせる。 ・社会性を身につけることの第一歩であることを認識させる。 ・洗濯機による洗濯の仕方をシミュレーションで行う。 ・学校生活上で起こりうる日常着トラブルを取り上げる。 ・見えないもの（汗、汚れなど）を見せる。 ・ノートをまとめるなど手を動かす時間を取る。	各1

3. 実習・実験に関する分析

「日常着の手入れ」の授業において、実習・実験は重要であるか「非常に重要である・重要である・あまり重要ではない・重要ではない」の4段階で質問したところ、重要であるという肯定的な回答をしたのは約94%と非常に高くなった。

次に、「日常着の手入れ」の授業における実習・実験の実施率を調査した結果を示す。調査の結果、全体の68%が「日常着の手入れ」の授業において実習・実験を行っていることが明らかになった。実習・実験の中で実施率が最も高かったのは、「アイロンかけ」でその実施率は56%であった。逆に、実施率が最も低かったのは、「洗濯機による洗濯」で実施率は16%と全体の2割にも満たなかった。実施できていない原因を他の調査事項と合わせて推察すると授業時数が足りないことや施設・設備が整っていないこと等が挙げられた。実習・実験は知識と技術などを獲得し、基本的な概念などの理解を深め、実際に活用する能力と態度を育成するための場である（中央教育審議会、2008）。その場がないために、学んだ知識が定着せず、生徒が将来洗濯を日常的にするようになった際に知識・技術を十分に活用した洗濯をすることができないのではないかと考えられる。

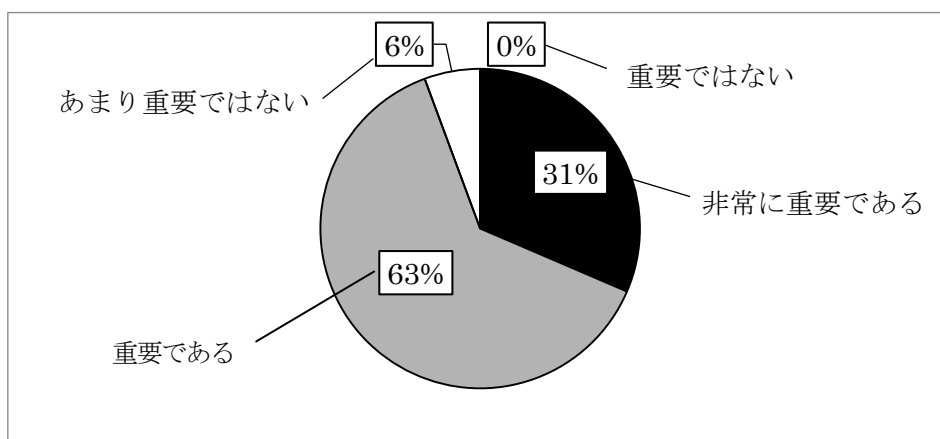


図3 実習・実験は重要であると思うか (N=125)

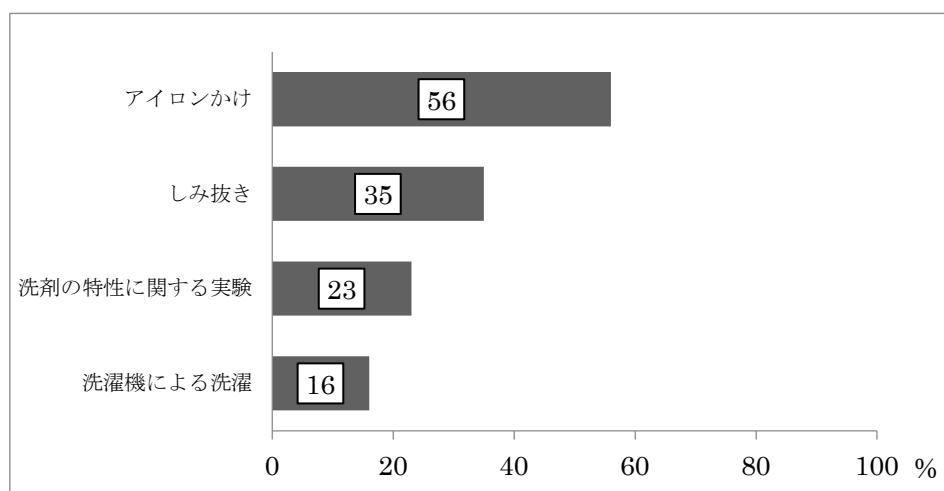


図4 各項目の実習・実験の実施率 (N=125)

4. 生徒の学習意欲に関する分析

「日常着の手入れ」に関連の深い項目について、教員からみた生徒の学習意欲を「非常に高い・高い・低い・非常に低い」の4段階で調査した結果を図5に示す。「取扱い絵表示」の学習意欲について肯定的な回答をしたのは約9割と最も高くなった。一方で、「洗濯機の種類」の学習意欲について肯定的な回答をしたのは約2割と最も低くなった。

5. 新しいタイプの洗剤に対する教員の意識の分析

新しいタイプの洗剤（ジェルボール型洗剤、弱酸性洗剤等）について授業で取り上げる必要があるか「取り上げた方がよい・既に取り上げている・必要ない」の3段階で調査した結果、「取り上げた方がよい・既に取り上げている」と肯定的な回答をしたのは約7割と高い結果が得られた。その中で、実際に取り上げているのは全体の約1割であった。

この結果から、多くの教員が新しいタイプの洗剤について関心を持っており、従来のタイプの洗剤のみならず、教科書に記載がなくとも新しいタイプの洗剤を取り上げたいと考えていることが明らかとなった。森田ほか(2014)も近年の家庭洗濯の方向性（着たら洗う・省エネ等）による洗剤の変化に対応した教育教材を検討する必要があることを指摘していることから、教科書には記載がなくとも現在市販されている新しいタイプの洗剤（ジェルボール型洗剤、弱酸性洗剤等）を必要に応じて授業の中で取り上げることが、洗濯における応用力を身につけるためにも必要であると考えられる。

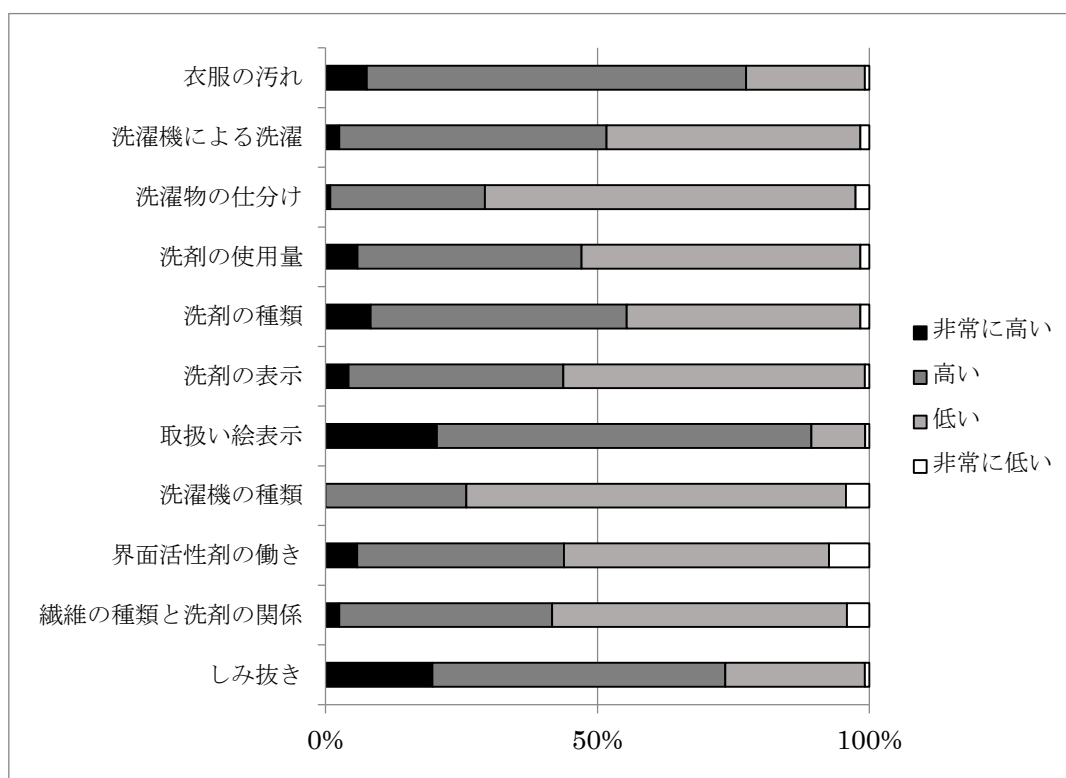


図5 教員からみた生徒の学習意欲 (N=125)

まとめ

適切かつ主体的な洗濯ができるようになるためには、家庭科教育の衣生活分野において、洗濯に関する十分な知識・技術を身に付けることが重要であると考えられる。そこで、本研究では家庭科における中学校家庭科学習指導要領C(1)ウのうち補修を除く「日常着の手入れ」の学習内容と課題を明らかにすることを目的とし、中学校家庭科教科書の分析及び家庭科教員を対象とした日常着の手入れに関する質問紙調査を行った。その結果、教科書分析では、教科書に記載されている従来通りのタイプに当てはまらない新しいタイプの洗剤が市販されていることが分かった。質問紙調査から、中学校家庭科の中における実習・実験の位置づけとしては、教員は実習・実験は重要であると考えているが、「洗濯機による洗濯の実習」については実施できていないということが明らかになった。

以上の結果から、学んだ知識・技術の定着や活用を図る実習・実験が十分に実施できていないため、確かな知識をもとにした適切かつ主体的な洗濯ができず、新しく開発された洗剤・洗濯機への応用力を生徒は身につけることができていないのではないかと推察した。実習・実験は学んだ知識を確かめる場であることから積極的に取り入れる必要がある。一方、実習・実験を実施していない原因として、授業時数が足りないことや施設・設備が整っていないこと等が挙げられたことから、実習・実験の内容としては限られた授業時間内にでき、身近なものを使ってできる内容でなければ実際の中学校での実施につながらないと考えられる。また、約7割の教員が新しいタイプの洗剤について授業で取り上げた方がよいと考えている。教科書には記載がなくとも現在市販されている新しいタイプの洗剤を必要に応じて授業の中で取り上げることが、洗濯における応用力を身につけるためにも必要であると考えられる。そして、適切な洗濯ができるようになるためには、商品の表示をよく見て、洗剤・洗濯機の情報を十分に得た上で、自分で洗濯ができるような消費者を育てていくことが求められる。今後は、生徒が学んだことを日常の洗濯行動に活用できる授業を開発していく予定である。

引用文献

- 国立教育政策研究所教育課程研究センター. 2009. 「特定の課題に関する調査（技術・家庭）調査結果(中学校)」 121-122.
- 中央教育審議会. 2008. 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」 102.
- 森田みゆき・増渕哲子・駒津順子・亀原めぐみ・小松恵美子・塚崎舞. 2014. 「新規洗浄剤に関わる中学校家庭科教科書の課題」『北海道教育大学紀要』 64(2), 181-187.
- 文部科学省. 2014. 『中学校学習指導要領解説 技術・家庭科編』. 58-61, (教育図書).